

優秀賞

# 見て、聞いて、学ぶ

福岡県 福岡県立筑紫高等学校一年 高祖 莉菜

「黙禱」。三月十一日、私たちは東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、目を瞑る。私が二歳の時、東日本大震災は起こりました。その時の日本全体の様子、テレビがどのような状況だったのか私は覚えていませんが、本当に現実で起こっているのかと目を疑うほどの大きな津波が車を流し、建物、家を破壊し、街を飲み込んでいく映像、人々が立てず、物につかまれず、恐怖を感じている映像が流れていたと、小学生の頃、先生方からお聞きしました。「地震は恐ろしい」。小さい頃からそんなふうになってきた私でしたが、実際に被災地である宮城県を訪れる機会があり、その時にこの自分の考え、イメージを大きく変えるきっかけに出会いました。

宮城県を訪れた際、まず私たちは避難してきた人たちが全員助かったという荒浜小学校に向かいました。その道中には津波が内陸部まで迫ってこないようにするための堤防や、マンションに津波から逃げるための階段などが設置されていたり、津波がくるとされる場所は危険区域と指定されたりしていました。

がおっしゃっていました。グループに分かれて救助のへりを待ったそうです。そのグループを分けたあとが黒板に残されていました。その日は雪も降っていて、寒く、一人一枚の毛布はありましたが、暖をとるには足りず、段ボールの上に座ったり、暗幕、カーテンを床に敷き、寒さに耐えていたそうです。その中には余震で泣く子もいたと言います。そして二十七時間後、全員の救助を終えました。避難してきた人たちが助かったのです。

案内所の方は荒浜小学校の中で協力し合い、助け合えたのは、日頃から荒浜地区に住む約二千二百人の人々が協力していたからだと言います。

荒浜小学校は運動会などの行事を地域の人々で行っており、二千二百人の人たちは大半が顔見知りだったそうです。日ごろからのつながり故に震災時も助け合うことができたとお聞きしました。私はここで人と人とのつながりがどれだけ大切か、助け合うことがどれほど素晴らしいことかを感じさせられました。自分が恐怖を感じ、苦しいときでも、助け合える地域での繋がり、家族、友だちとの繋がりをもてるように努めたいとも感じました。

宮城県の訪問を終えて、これからもっと家族、友達と過ごせる日々、今の環境に感謝をし、地域の人々や周りの人々とつながり合って日頃から支え合って生きていきたいと思えました。初め、宮城県では津波の恐ろしさにより実感してこれからどう向き合うのかを学ぶという思

そして荒浜小学校に到着。校舎を見学し、衝撃をうけました。鉄の部分は津波の海水で錆び、床、壁、天井はボロボロに剥がれ落ち、蛍光灯はぶら下がった状態でした。教室のベランダの柵は人が曲げるにはありえない曲がり方をしていました。ここだけでもどれほど津波は威力があり、大切なものを一瞬にして壊してしまうのかを感じました。二階にあがると「津波到達ライン」と書かれたパネルがありました。足首より上くらいでしたが、実際には津波は荒立っていてそれよりも高く恐ろしかったです。二階にまで津波が押し寄せてくる。コンクリートを突き破って二階に迫ってきたそうです。想像しただけでもとても恐怖を感じました。地震で立ってられない、津波が押し寄せてくる恐怖があったと言います。その時に小学校に避難した児童、教職員、住民ら三百二十名は屋上に逃げました。屋上から見る街は湖のような感じで静かに迫ってくる感じがあって怖かったと被災された方

いだけでしたが実際は違いました。

宮城県では自分が想像していた以上のことばかりでした。私は生涯、荒浜小学校から教えてもらった教訓を忘れることはないです。私が教えてもらった日頃から人と繋がり、支え合って生きていくことはどんな場面でも大切なことです。だからこそ私はもっと人々と繋がり合い、助け合って人生を歩んでいきたいです。歩んでいける人間になりたいです。

